湯女の魂

泉鏡花

一

誠に差出がましく恐入りますが、しばらく御清聴を煩わしまする。

八宗の中にも真言宗には、秘密の法だの、九字を切るだのと申しまして、不思議なことをするのでありますが、もっともこの宗門の出家方は、始めから寒垢離、断食など種々な方法で法を修するのでございまして、向うに目指す品物を置いて、これに向って呪文を唱え、印を結んで、錬磨の功を積むのだそうでありまする。修錬の極致に至りますると、隠身避水火遁の術など

はいうまでもございませぬ、如意自在な法を施すことが出来るのだと申すことで。

　ある真言寺（でら）の小僧が、夜分墓原を通りますと、樹と樹との間に白いものがかかって、ふらふらと動いていた。暗さは暗し、場所柄は場所柄なり、可恐（おそろし）さの余り歯の根も合わず顫（ふる）え顫え呪文を唱えながら遁（に）げ帰りましたそうでありますが、翌日見ますとそこに乾かしてございました浴衣が、ずたずたに裂けていたと申しますよ、修行もその位になりましたこの小僧さんなぞのは、向って九字を切ります目当に立てておく、竹切、棒などが折れるといいます。

しかし可加減(いい)な話だ、今時そんなことがある訳のものではないと、ある人が一人の坊さんに申しますと、その坊さんは黙って微笑(ほほえ)みながら、拇指(おやゆび)を出して見せました、ちと落語家(はなしか)の申します蒟蒻(こんにゃく)問答のようでありますけれども、その拇指を見せたのであります。

そして坊さんが言うのに、まず見た処この拇指に、どの位な働きがあると思わっしゃる、たとえば店頭(みせさき)で小僧どもが、がやがや騒いでいる処へ、来たよといって拇指を出して御覧なさい、ぴったりと静(しず)まりましょう、また若い人にちょっと小指を見せたらどうであろう、銀座の通(とおり)で手を挙げれば、鉄道馬車が停(とま)るではなか

ろうか、も一つその上に笛を添えて、片手をあげて吹鳴らす事になりますと、停車場（ステイション）を汽車が出ますよ、使い処、用い処に因っては、これが人命にも関われば、喜怒哀楽の情も動かします。これをでかばちに申したら、国家の安危に係（かか）わるような、機会（おり）がないとも限らぬ、その拇指、その小指、その片手の働きで。

しかるをいわんや臨兵闘者皆陣列在前（りんぴょうとうしゃかいじんれつざいぜん）といい、令百由旬内無諸哀艱（りょうひゃくゆじゅんないむしょあいげん）と唱えて、四縦五行の九字を切るにおいては、いかばかり不思議の働（はたらき）をするかも計られまい、と申したということを聞いたのであります。

いや、余事を申上げまして恐入りますが、唯今（ただいま）私が

不束(ふつつか)に演じまするお話の中頃に、山中孤家(ひとつや)の怪しい婦人(おんな)が、ちちんぷいぷい御代(ごよ)の御宝(おんたから)と唱えて蝙蝠(こうもり)の印を結ぶ処がありますから、ちょっと申上げておくのであります。

さてこれは小宮山(こみやま)良介という学生が、一(ある)夏北陸道を漫遊しました時、越中の国の小川という温泉から湯女(ゆな)の魂を託(ことづか)って、遥々(はるばる)東京まで持って参ったというお話。

越中に泊(とまり)と云って、家数千軒ばかり、ちょっと繁昌(はんじょう)な町があります。伏木(ふしき)から汽船に乗りますと、富山の岩瀬、四日市、魚津、泊となって、それから糸魚川(いといがわ)、

関（せき）、親不知（おやしらず）、五智を通って、直江津へ出るのでありま
す。

小宮山はその日、富山を朝立（あさだち）、この泊の町に着いたのは、午後三時半頃。繁昌な処と申しながら、街道が一条（ひとすじ）海に添っておりますばかり、裏町、横町などと、謂（い）ってもないのであります、その町の半（なかば）頃のと有る茶店へ、草臥（くたび）れた足を休めました。

二

渋茶を喫しながら、四辺（あたり）を見る。街道の景色、また

格別でございまして、今は駅路の鈴の音こそ聞えませぬが、馬、車、処の人々、本願寺詣(もうで)の行者の類、これに豆腐屋、魚屋、郵便配達などが交(まじ)って往来引きも切らず、「早稲(わせ)の香や別け入る右は有磯海(ありそうみ)」という芭蕉の句も、この辺(あたり)という名代の荒海(あらうみ)、ここを三十噸(とん)、乃至(ないし)五十噸の越後丸、観音丸などと云うのが、入れ違いまする煙の色も荒海を乗越(のっこ)すためか一際濃く、且つ勇ましい。

茶店(ちゃみせ)の裏手は遠近(おちこち)の山また山の山続きで、その日の静かなる海面よりも、一層かえって高波を蜿(うね)らしているようでありました。

小宮山は、快く草臥（くたびれ）を休めましたが、何か思う処あるらしく、この茶屋の亭主を呼んで、

「御亭主、少し聞きたい事があるんだが。」

「へい、お客様、何でございますな。氷見鯖（ひみさば）の塩味、放生津鱈（ほうじょうづだら）の善悪（よしあし）、糸魚川の流れ塩梅（あんばい）、五智の如来（にょらい）へ海豚（いるか）が参詣（さんけい）を致しまする様子、その鳴声、もそっと遠くは、越後の八百八後家（はっぴゃくやごけ）の因縁でも、信濃川の橋の間数（まかず）でも、何でも存じておりますから、はははは。」

と片肌脱、身も軽いが、口も軽い。小宮山も莞爾（にっこり）して、

「折角だがね、まずそれを聞くのじゃなかったよ。」
「それはお生憎様（あいにくさま）でござりまするな。」
何が生憎。
「私の聞きたいのは、ここに小川の温泉と云うのがあるッて、その事なんだがどうだね。」
「ええ、ござりますとも、人足（ひとあし）も通いませぬ山の中で、雪の降る時白鷺（しらさぎ）が一羽、疵所（きずしょ）を浸しておりましたのを、狩人の見附けましたのが始りで、ついこの八九年前から開けました。一体、この泊のある財産家の持地でござりますので、仮（ほん）の小屋掛で近在の者へ施し半分に遣（や）っておりました処、さあ、盲目（めくら）が開く、躄（いざり）が立つ、

子供が産れる、乳が出る、大した効能。いやもう、神(しん)のごとしとござりまして、所々方々から、彼岸詣(ひがんもうで)のように、ぞろぞろと入湯に参りまする。
ところで、二階家を四五軒建てましたのを今では譲受けた者がござりまして、座敷も綺麗、お肴(さかな)も新らしい、立派な本場の温泉となりまして、私はかような田舎者で存じませぬが、何しろ江戸の日本橋ではお医者様でも有馬の湯でもと云うた処を、芸者が、小川の湯でもと唄うそうでござりますが、その辺は旦那御存じでござりましょうな。いかが様で。」

反対(あべこべ)に鉄砲を向けられて、小宮山は開いた口が塞(ふさ)が

らず。
「土地繁昌の基(もとい)で、それはお目出度い。時に、その小川の温泉までは、どのくらいの道だろう。」
「ははあ、これからいらっしゃるのでござりますか。それならば、山道三里半、車夫(くるまや)などにお尋ねになりますれば、五里半、六里などと申しますが、それは丁場の代価(ねだん)で、本当に訳はないのでござりまする。」
「ふむ、三里半だな可(よ)し。そして何かい柏屋(かしわや)と云う温泉宿は在るかね。」
「柏屋！　ええもう小川で一等の旅籠屋(はたごや)、畳もこのごろ入換えて、障子もこのごろ張換えて、お湯もどんど

ん沸いております。」
と年甲斐もない事を言いながら、亭主は小宮山の顔を見て、いやに声を密(ひそ)めたのでありますな、怪(けし)からん。
「へへへ、好(い)い婦人(おんな)が居(お)りますぜ。」
「何を言っているんだ。」
「へへへ、お湯をさして参りましょうか。」
「お茶もたんと頂いたよ。」
と小宮山は傍(わき)を向いて、飲さしの茶を床几(しょうぎ)の外へざぶり明けて身支度に及びまする。

三

小宮山は亭主の前で、女の話を冷然として刎(は)ね附けましたが、密(ひそか)に思う処がないのではありませぬ。一体この男には、篠田(しのだ)と云う同窓の友がありまして、いつでもその口から、足下(そっか)もし折があって北陸道を漫遊したら、泊から訳はない、小川の温泉へ行って、柏屋と云うのに泊ってみろ、於雪(おゆき)と云って、根津や、鶯谷(うぐいすだに)では見られない、田舎には珍らしい、佳(い)い女が居るからと、度々聞かされたのでありますが、ただ、佳い女が居るとばかりではない、それが篠田とは浅からぬ関係があるように思われまする、小宮山はどの道

一泊するものを、乾燥無味な旅籠屋に寝るよりは、多少色艶っぽいその柏屋へと極めたので。

さて、亭主の口と盆の上へ、若干かお鳥目をはずんで、小宮山は紺飛白の単衣、白縮緬の兵児帯、麦藁帽子、脚絆、草鞋という扮装、荷物を振分にして肩に掛け、既に片影が出来ておりますから、蝙蝠傘は畳んで提げながら、茶店を発って、従是小川温泉道と書いた、傍示杭に沿いて参りまする。

行くことおよそ二里ばかり、それから爪先上りのだらだら坂になった、それを一里半、泊を急ぐ旅人の心には、かれこれ三里余も来たらうと思うと、ようやく

小川の温泉に着きましてございまする。

志す旅籠屋は、尋ねると直ぐに知れた、有名なもので、柏屋金蔵。

そのまま、ずっと小宮山は門口(かどぐち)に懸(かか)りまする。

「いらっしゃいまし。」

「お早いお着(つき)。」

「お疲れ様で。」

と下女(おんな)共が口々に出迎えまする。

帳場に居た亭主が、算盤(そろばん)を押遣って

「これ、お洗足(すすぎ)を。それ御案内を。」

とちやほや、貴公子に対する待遇(もてなし)。服装(みなり)もお聞きの

通り、それさえ、汗に染み、埃（ほこり）に塗（まみ）れた、草鞋穿（わらじばき）の旅人には、過ぎた扱いをいたしまする。この温泉場は、泊からわずか四五里の違いで、雪が二三尺も深いのでありまして、冬向は一切浴客（よっかく）はありませんで、野猪（しし）、狼、猿の類（たぐい）、鷺（さぎ）の進（しん）、雁九郎（かりくろう）などと云う珍客に明け渡して、旅籠屋は泊の町へ引上げるくらい。賑（にぎわ）いますのは花の時分、盛夏三伏（さんぷく）の頃（ころおい）、唯今はもう九月中旬、秋の初（はじめ）で、北国（ほっこく）は早く涼風（すずかぜ）が立ますから、これが逗留（とうりゅう）の客と云う程の者もなく、二階も下も伽藍堂（がらんどう）、たまたまのお客は、難船が山の陰を見附けた心持でありますから。

「こっちへ。」と婢女（おんな）が、先に立って導きました。奥座敷上段の広間、京間の十畳で、本床附（ほんどこ）、畳は滑るほど新らしく、襖（ふすま）天井は輝くばかり、誰（たれ）の筆とも知らず、薬草を銜（くわ）えた神農様の画像の一軸、これを床の間の正面に掛けて、花は磯馴（そなれ）、あすこいらは遠州が流行りまする処で、亭主の好きな赤烏帽子（あかえぼし）、行儀を崩さず生かっている。

小宮山はその前に、悠然と控えました。

さて、お茶、煙草盆（たばこ）、御挨拶（ごあいさつ）は略しまして、やがて持って来た浴衣に着換えて、一風呂浴びて戻る。誠や温泉の美くしさ、肌、骨までも透通り、そよそよと風

が身に染みる、小宮山は広袖（どてら）を借りて手足を伸ばし、打縦（うちくつろ）いでお茶菓子の越（こし）の雪、否、広袖だの、秋風だの、越の雪だのと、お愛想までが薄ら寒い谷川の音ももの寂しい。

湯上りで、眠気は差したり、道中記を記（つ）けるも懶（ものう）し、入（い）る時帳場で声を懸けたのも、座敷へ案内をしたのも、浴衣を持って来たのも、お背中を流しましょうと言ったのも、皆手隙（てすき）と見えて、一人々々入交（いれかわ）ったが、根津、鶯谷はさて置いて柳原にもない顔だ、於雪と云うのはどうしたろう、おや女の名で、また寒くなった、これじゃ晩に熱燗（あつかん）で一杯遣らずばなるまい。

四

鮎の大きいのは越中の自慢でありますが、もはや落鮎になっておりますけれども、放生津の鱈や、氷見の鯖より優でありまするから、魚田に致させまして、吸物は湯山の初茸、後は玉子焼か何かで、一銚子つけさせまして、杯洗の水を切るのが最初。

「姉さん、お前に一つ。」

などと申しまする時分には、小宮山も微酔機嫌、向うについておりますのは、目指すお雪ではなくて、初

霜とや謂わむ。薄く塗った感心に襟脚の太くない、二十歳(はたち)ばかりの、愛嬌(あいきょう)たっぷりの女で、二つ三つは行ける口、四方山(よもやま)の話も機(はず)む処から、小宮山も興に入り、思わず三四合を傾けまする。

後(うしろ)の花が遠州で、前の花が池の坊に座を構え、小宮山は古流という身で、くの字になり、ちょいと杯を差置きましたが、

「姉さん、新らしく尋ねるまでもないが、ここはたしか柏屋だね。」

「はい、さようでございますよ。」

「柏屋だとするとその何、姉さんが一人ある筈(はず)だね。」

「皆（みんな）で四人（よったり）。」

「四人？　成程四人かね。」

「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「何、お雪さんと云うのが居る？」

と小宮山は、金の脈を掘当てましたな、かねての話が事実となったのでありますから、漫（そぞろ）に勇んだので乗出しようが尋常事（ただごと）でありませんから、

「おや。」

小宮山はわざとらしく威儀を備え、

「そうだ、お前さんの名は何と云う。」

「そうだは御挨拶でございますこと、私は名も何(なんに)も
ございませんよ。」
「いいえさ、何と云うのだ。」
「お雪さんにお聞きなさいまし、貴方(あなた)は御存じでい
らっしゃるんだよ、可憎(にくら)しゅうございますねえ、でも
あのお気の毒さまでございますこと、お雪さんは貴方、
久しい間病気で臥(ふせ)っておりますが。」
「何、病気だい、」
「はあ、ぶらぶら病(やまい)なんでございますが、このごろは
また気候が変りましたので、めっきりお弱んなすった
ようで、取乱しておりますけれど、貴方御用ならばちょ

いとお呼び申してみましょうか。」

「いえ、何、それにゃ及ばないよ。」

「あのう、きっと参りましょうよ、外ならぬ貴方様の事でございますもの。」

「どうでしょうか、此方様(こなた)にも御存じはなしさ、ただ好(い)い女だって途中で聞いて来たもんだから、どうぞ悪(あ)しからず。」

「どう致しまして、憚様(はばかりさま)。」

と言ったばかり、ちょいと言葉が途絶えましたから、小宮山は思い出したように、

「何と云うのだね、お前さんは。」

「手前は柏屋でございます。」

小宮山は苦笑(にがわらい)を致しましたが、已(や)む事を得ず、

「それじゃ柏屋の姉さん、一つ申上げることにしよう。」

「まあお酌を致しましょう。私だって可(い)いじゃありませんか、あれさ。」

「いや全く。お雪さんでも、酒はもう可かんのだよ。」

「それじゃ御飯をおつけ申しましょう、ですがお給仕となるとなおの事、誰かにおさせなさりとうございましょうね。」

「何、それにゃ及ばんから、御贔屓(ごひいき)分に盛(もり)を可(よ)く、ね。」

「いえ、道中筋で盛の可いのは、御家来衆に限りますとさ、殿様は軽くたんと換えて召食(めしあが)りまし。はい、御膳(ごぜん)。」

「洒落(しゃれ)かい、いよ柏屋の姉さん、本当に名を聞かせておくれよ。」

「手前は柏屋でございます。」

「お前の名を問うのだよ。」

「手前は柏屋でございます。」

と上手に御飯を装(よそ)いながら、ぽたぽた愛嬌を溢(こぼ)しますよ。

五

御膳の時さえ、何かと文句があったほど、この分ではは寝る時は容易でなかろうと、小宮山は内々恐縮をしておりましたが、女は大人しく床を伸べてしまいました。夜具は申すまでもなく、絹布（けんぷ）の上、枕頭（まくらもと）の火桶（ひおけ）へ湯沸（ゆわかし）を掛けて、茶盆をそれへ、煙草盆に火を生ける、手当が行届くのでありまする。

あまりの上首尾、小宮山は空可恐（そらおそろ）しく思っております。女は慇懃（いんぎん）に手を突いて、

「それでは、お緩（ゆっく）り御寝（おやす）みなさいまし、まだお早うご

ざいますから、私共は皆（みんな）起きております、御用がございましたら御遠慮なく手をお叩き遊ばして、それからあのお湯でございますが、一晩沸いておりますから、幾度でも御自由に御入り遊ばして、お草臥（くたびれ）にも、お体にも大層利きますんでございますよ。」

と大人しやかに真面目（まじめ）な挨拶、殊勝な事と小宮山も更（あらたま）り、

「色々お世話だった。お蔭で心持好（よ）く手足を伸すよ、姐（ねえ）さんお前ももう休んでおくれ。」

「はい、難有（ありがと）うございます、それでは。」

と言って行こうとしましたが、ふと坐り直しました

から、小宮山は、はてな、柏屋の姐さん、ここらでその本名を名告(なの)るのかと可笑(おか)しくもございまする。

すると、女は後先を眴(みまわ)しましたが、じりじりと寄って参り、

「時につかぬ事をお伺い申しまして、恐れ入りますが、貴方は方々御旅行をなさいまして、可恐(おそろ)しい目にお逢い遊ばした事はございませんか。」

小宮山は、妙な事を聞くと思いましたが、早速、

「いや、幸い暴風雨(あらし)にも逢わず、海上も無事で、汽車に間違もなかった。道中の胡麻(ごま)の灰などは難有(ありがた)い御代(みよ)の事、それでなくっても、見込まれるような金子(かね)も持

たずさ、足も達者で一日に八里や十里の道は、団子を嚙（かじ）って野々宮高砂（たかさご）というのだから、ついぞまあこれが可恐（おそろ）しいという目に逢った事はないんだよ。」

「いえ、そんな事ではないのでございます。狸が化けたり、狐が化けたり、大入道が出ましたなんて、いうような、その事でございます。」

「馬鹿な事を言っちゃや可（い）かん、子供が大人になったり、嫁が姑（しゅうと）になったりするより外、今時化けるって奴（やつ）があるものか。」

と一言の許（もと）に笑って退（の）けたが、小宮山はこの女何を言うのかしらと、かえって眉毛に唾（つば）を附けたのであり

まする、女は極く生真面目で、
「実はお客様、誠に申兼ねましたが、少々お願いがございますんですよ、外の事ではありませんが、さっき貴方のお口からも、ちょいとお話のございました、あのお雪さんの事でございますが、佳い女はなぜあんなに体が弱いのでございましょうねえ。平生からの処へ、今度煩い附きまして、もう二月三月、十日ばかり前から、また大変に悩みますので、医者と申しましても、三里も参らねばなりませぬ。薬も何も貴方何の病気だか、誰にも考えが附きませぬので、ただもう体の補いになりますようなものを食べさしておくばかりでござ

いますが、このごろじゃ段々痩（や）せ細って、お粥（かゆ）も薄いのでなければ戴（いただ）かないようになりました。気心の好（い）い平生（ふだん）大人しい人でありますから、私共始め御主人も、かれこれ気を揉（も）んでおりますけれども、どこが痛むというではなし、苦しいというではなし、労（いたわ）りようがないのでございますよ。それでね、貴方、その病気と申しますのが、風邪を引いたの、お肚（なか）を痛めたのというのではない様子で、まあ、申せば、何か生霊（いきりょう）が取着（とッつ）いたとか、狐が見込んだとかいうのでございましょう。何でも悩み方が変なのでございますよ。その証拠には毎晩同じ時刻に魘（うな）されましてね。」

小宮山も他人（ひと）ごとのようには思いませぬ。

六

「その時はどんなに可恐（おそろ）しゅうございましょう、苦しいの、切ないの、一層殺して欲しいの、とお雪さんが呻（うめ）きまして、ひいひい泣くんでございますもの、そしてね貴方、誰かを摑（つかま）えて話でもするように、何だい誰だ、などと言うではございませんか、その時はもう内曲（うちわ）の者一同、傍（そば）へ参りますどころではございませんよ、何だって貴方、異類異形のものが、病人の寝間に

むらむらしておりますようで、遠くにいて皆(みんな)が耳を塞(ふさ)いで、突伏(つッぷ)してしまいますわ。

それですから、その苦しみます時傍(そば)に附いていて、撫(な)で擦(さす)りなどする事は誰も怪我(けが)にも出来ません。病人は薬より何より、ただ一晩おちおち心持好く寐(ね)て、どうせ助らないものを、せめてそれを思い出にして死にたいと。肩息で貴方ね、口癖のように申すんですよ、どうぞまあそれだけでも協(かな)えてやりたいと、皆(みんな)が心配をしますんですが、加持祈禱(かじきとう)と申しましても、どうして貴方ここいらは皆(みんな)狸の法印、章魚(たこ)の入道ばっかりで、当(あて)になるものはありゃしませぬ。

それに、本人を倚掛（よっかか）らせますのには、しっかりなすって、自分でお雪さんが頼母（たのも）しがるような方でなくっちゃ可（い）けますまい、それですのにちょいちょいお見えなさいまする、どのお客様も、お止し遊ばせば可いのに、お妖怪（ばけ）と云えば先方（さき）で怖がります、田舎の意気地（いくじ）無しばかり、俺（おいら）は蟒蛇（うわばみ）に呑まれて天窓（あたま）が兀（は）げたから湯治に来たの、狐に蚯蚓（みみず）を食わされて、それがためお肚（なか）を痛めたの、天狗に腕を折られたの、私共が聞いてさえ、馬鹿々々しいような事を言って、それが真面目だろうじゃありませんか。

ですもの、どうして病人の力になんぞ、なってくれ

る事が出来ましょう。

こう申しちゃ押着けがましゅうございますが、貴方はお見受け申したばかりでも、そんな怪しげな事を爪先へもお取上げ遊ばすような御様子は無い、本当に頼母しくお見上げ申しますんで。

実は病人は貴方の御話を致しました処、そうでなくってさえ東京のお方と聞いて、病人は飛立つばかり、どうぞお慈悲にと申しますのは、私共からもお願い申して上げますのでございますが、誠に申しかねましたが、一晩お傍（そば）で寝かしくださいまして、そうして本人の願（ねがい）を協（かな）えさしてやって下さいまし、後生でございい

ますから。

　それに様子をお見届け下さいますれば、どんなにか難有（ありがと）うございましょう。」

　としみじみ、早口の女の声も理に落ちまして、いわゆる誠はその色に顕（あらわ）れたのでありますから、唯今怪しい事などは、身の廻り百由旬（ひゃくゆじゅん）の内へ寄せ附けないという、見立てに預（あずか）りました小宮山も、これを信じない訳には行かなくなったのでありまする。

「そりゃ何しろとんだ事だ、私は武者修行じゃないのだから、妖怪を退治るという腕節（うでっぷし）はないかわりに、幸い臆病（おくびょう）でないだけは、御用に立って、可いとも！　望

みなら一晩看病をして上げよう。ともかくも今のその話を聞いても、その病人を傍(そば)へ寝かしても、どうか可恐(おそろ)しくないように思われるから。」

と小宮山は友人の情婦(いろ)ではあり、煩っているのが可哀そうでもあり、殊には血気壮(さかん)なものの好奇心も手伝って、異議なく承知を致しました。

「しかし姐(ねえ)さん、別々にするのだろうね。」

「何でございます。」

「何その、お床の儀だ。」

「おほほ、お雪さんにお聞きなさいまし。」

「可煩(うるさ)いな、まあ可いや。」

「さようならば、どうぞ。」

「可し可し。そのかわり姐さん、お前の名を言わないのじゃ……、」

「手前は柏屋でございます。」

と急いで出て行く。

これからお雪、良助、寝物語という、物凄い事に相成りまする。

七

「これは旦那様。」

入交って亭主柏屋金蔵、揉手（もみで）をしながらさきに挨拶に来た時より、打解けまして馴々（なれなれ）しく、
「どうも行届きませんで、御粗末様でございます。」
「いや色々、さあずッとこちらへ、何か女中が御病気だそうで、お前さんも、何かと御心配でありましょう。」
「へい、その事に就きまして、唯今はまた飛んだ手前勝手な御難題、早速御聞済（おききずみ）下さいまして何とも相済みませぬ。実は私からお願い申しまする筈（はず）でござりましたが、かようなものでも、主人（あるじ）と思召（おぼしめ）し、成りませぬ処をたっても御承知下さいますようでは、恐れ入りまするから、御断（おことわり）の遊ばし可いよう、わざと女共から御

話を致させましたのでござりまするが、かように御心安く御承諾下さいましては、かえって失礼になりましてござりまする。

　早速当人にも相伝えまして、久しぶりで飛んだ喜ばせてやりました。全く御蔭様でござりまする。何が貴方、かねての心懸（こころがけ）が宜（よろ）しゅうござりますので、私共もはや、特別に目を懸けまして、他人のように思いませぬから、毎晩魘（うな）されまするのが、目も当てられませぬ、さればと申して、目を塞（ふさ）いで寝まする訳には参りませずな、いやもう。」

　と言懸けて、頷（うなず）く小宮山の顔を見て、てかてかとし

た天窓を掻き、
「かような頭を致しまして、あてこともない、化物沙汰を申上げまするばかりか、譫言の薬にもなりませんというは、誠に早やもっての外でござりますが、自慢にも何にもなりません、生得大の臆病で、引窓がぱたりといっても箒が仆れても怖な喫驚。
それに何と、いかに秋風が立って、温泉場が寂れたと申しましても、まあお聞き下さいまし。とんでもない奴等、若い者に爺婆交りで、泊の三衛門が百万遍を、どうでござりましょう、この湯治場へ持込みやがって、今に聞いていらっしゃい隣宿で始めますから、けたい

が悪いじゃごわせんか、この節あ毎晩だ、五智で海豚(いるか)が鳴いたって、あんな不景気な声は出しますまい。憑物(つきもの)のある病人に百万遍の景物じゃ、いやもう泣きたくなりまする。はははは、泣くより笑(わらい)とはこの事で、何に就けてもお客様に御迷惑な。」

「なあに、こっちの迷惑より、そういう御様子ではさぞ御当惑をなさるでありましょう、こう遣って、お世話になるのも何かの御縁でしょうから、皆さん遠慮しないが宜しい。」

と二人で差向(さしむかい)で話をしておりまする内に、お喜代、お美津でありましょう、二人して夜具をいそいそと持

運び、小宮山のと並べて、臥床(ふしど)を設けたのでありますが、客の前と気を着けましたか、使ってるものには立派過ぎた夜具、敷蒲団(しきぶとん)、畳んだまま裾(すそ)へふっかりと一つ、それへ乗せました枕は、病人が始終黒髪を取乱しているのでありましょう、夜の具(もの)の清らかなるには似ず垢附(あかつ)きまして、思做(おもいな)しか、涙の跡も見えたのでありまする。

お美津、お喜代は、枕の両傍(りょうばた)へちょいと屈(かが)んで、きゅうッきゅうッと真直(まっすぐ)に引直し、小宮山に挨拶をして、廊下の外へ。

ここへ例の女の肩に手弱(たお)やかな片手を掛け、悩まし

い体を、少し倚懸(よりかか)り、下に浴衣、上へ繻子(しゅす)の襟の掛(かか)った、縞物(しまもの)の、白粉垢(おしろいあか)に冷たそうなのを襲(かさ)ねて、寝衣(ねまき)のままの姿であります、幅狭(はばせま)の巻附帯、髪は櫛巻(くしまき)にしておりますが、さまで結ばれても見えませぬのは、客の前へ出るというので櫛の歯に女の優しい心を籠(こ)めたものでありましょう。年紀(とし)の頃は十九か二十歳(はたち)、色は透通る程白く、鼻筋の通りました、窶(やつ)れても下脹(しもぶくれ)な、見るからに風の障るさえ痛々しい、葛(くず)の葉のうらみがちなるその風情。

八

高が気病（きやみ）と聞いたものが、思いの外のお雪の様子、小宮山はまず哀れさが先立って、主（あるじ）と顔を見合せまする。

介添の女はわざと浮いた風で、

「さあ御縁女様。」

と強く手を引いて扶（たす）け入れたのでありまする。お雪はそんな中（うち）にも、極（きまり）が悪かったと見え、ぼんやり顔をば赧（あか）らめまして、あわれ霜に悩む秋の葉は美しく、蒲団の傍（そば）へ坐りました。

「お雪さん、嬉しいでしょう。」

亭主までが嬉しそうに、莞爾々々（にこにこ）して、
「よくお礼を申上げな。」
と言うのであります。別（わ）けて申上げまするが、これから立女役（たておやま）がすべて女寅（めとら）が煩ったという、優しい哀れな声で、ものを言うのでありまするが、春葉君だと名代の良（い）い処を五六枚、上手に使い分けまして、誠に好（い）い都合でありますけれども、私の地声では、ちっとも情が写りますまい。その辺は大目に、いえ、お耳にお聞溢（ききこぼ）しを願いまして、お雪は面映気（おもはゆげ）に、且つ優（しお）らしく手を支（つか）え、
「難有（ありがと）う存じます、どうぞ、……」

とばかり、取縋(とりすが)るように申しました。小宮山は、亭主といい、女中の深切、お雪の風采(とりなり)、それやこれや胸一杯になりまして、思わずほろりと致しましたが、さりげのう、ただ頷(うなず)いていたのでありました。

「そらお雪、どうせこうなりゃ御厄介だ。お時儀(じぎ)も御挨拶も既に通り越しているんだからの、御遠慮を申さないで、早く寝かして戴くと可い、寒いと悪かろう。俺(おれ)でさえぞくぞくする、病人はなおの事(こ)ッた、お客様ももう御寝(げし)なりまし、お鉄や、それ。」

と急遽(そそくさ)して、実は逃構(にげがまえ)も少々、この臆病者は、病人の名を聞いてさえ、悚然(ぞっ)とする様子で、

お鉄（此奴あ念を入れて名告る程の事ではなかった）は袖屏風で、病人を労っていたのでありますが、

「さあさあ早くその中へ、お床は別々でも、お前さん何だよ御婚礼の晩は、女が先へ寝るものだよ、まあさ、御遠慮を申さないで、同じ東京のお方じゃないか、裏の山から見えるなんて、噂ばかりの日本橋のお話でも聞いて、ぐっと気をお引立てなさいなね。水道の水を召食ッていらっしゃれば、お色艶もそれ、お前さんのあの方に、ねえ旦那。」

「まずの。」

と言ったばかりで、金蔵はまじりまじり。大方時刻

の移るに従うて、百万遍を気にするのでありましょう。
お鉄は元気好く含羞(はにか)むお雪を柔(やわら)かに素直に寝かして、袖を叩き、裾を圧(おさ)え、
「さあ、お客様。」
と言ったのでありまするが、小宮山も人目のある前で枕を並べるのは、気が差して跋(ばつ)も悪うございますから、
「まああお前さん方。」
「さようならば、御免を蒙(こうむ)りまする。伊賀越(ごえ)でおいでなすったお客じゃないから、私(わし)が股引穢(ももひきむさ)うても穿(は)いて寝るには及ばんわ、のうお雪。」

「旦那笑談（じょうだん）ではございませんよ、失礼な。お客様御免下さいまし。」

と二人は一所に挨拶をして、上段の間を出て行（ゆ）きまする、親仁（おやじ）は両提（りょうさげ）の莨入（たばこいれ）をぶら提げながら、克明に禿頭（はげあたま）をちゃんと据えて、てくてくと敷居を越えて、廊下へ出逢頭（であいがしら）、わッと云う騒動（さわぎ）。

「痛え。」とあいたしこをした様子。

さっきから障子の外に、様子を窺（うかが）っておりましたものと見える、誰か女中の影に怯（おび）えたのでありまする。

笑うやら、喚（わめ）くやら、ばたばたという内に、お鉄が障子を閉めました。後の十畳敷は寂然（ひっそり）と致し、二筋の

燈心は二人の姿と、床の間の花と神農様の像を、朦朧と照しまする。

九

小宮山は所在無さ、やがて横になって衾を肩に掛けましたが、お雪を見れば小さやかにふっかりと臥して、女雛を綿に包んだようでありまする。もとより内気な女の、先方から声を懸けようとは致しませぬ。小宮山は一晩介抱を引受けたのでありまするから、まず医者の気になりますと物もいい好いのでありました。

「姉さん、さぞ心細いだろうね、お察し申す。」
「はい。」
「一体どんな心持なんだい。何でも悪い夢は、明かしてぱッぱと言うものだと諺（ことわざ）にも云うのだから、心配事は人に話をする方が、気が霽（は）れて、それが何より保養になるよ。」
としみじみ労（いたわ）って問い慰める、真心は通ったと見えまして、少し枕を寄せるようにして、小宮山の方を向いて、お雪は溜息（ためいき）を吐（つ）きましたが、
「貴方は東京のお方でございますってね。」
「うむ、東京だ、これでも江戸ッ児（こ）だよ。」

「あの、そう伺いますばかりでも、私は故郷の人に逢いましたようで、お可懐（なつか）しいのでござりますよ。」

「東京が贔屓（ひいき）かい、それは難有（ありがた）いね、そしてここいらに、贔屓は珍しいが、何か仔細（しさい）が有りそうだな。」

小宮山は、聞きませんでもその因縁（いわれ）を知っておりましょう、けれども、思うさま心の内を話さして、とにかく慰めてやりたい心。

「東京は大層広いそうでございますから、泊のものを、こちらで存じておりますような訳には参りますまいけれども、あのう、私は篠田様（さん）と云う、貴方の御所（おところ）の方に、少し知己（しりあい）があるのでございまして。」

小宮山は肚(はら)の内で、これだな……。

「訳は申上げる事は出来ませんが、そのお方の事が始終気に懸(かか)りまして、それがために、いつでも泣いたり笑ったり、自分でも解りませんほど、気を揉(も)んでおりました。それがあの、病の原因(もと)なんでございましょう。

昼も夜もどっちで夢を見るのか解りませんような心持で、始終ふらふら致しておりましたが、お薬も戴きましたけれども、復(なお)ってからどうという張合がありませんから、弱りますのは体ばかり、日が経(た)ちますと起きてるのが大儀でなりませんので、どこが痛むというでもなく、寝てばかりおりましたのでございますよ。」

さあ驕(おご)れ、手も無くそれは恋病(こいわずらい)だと、ここで言われた訳ではありませんから、小宮山は人の意気事を畏(かしこ)まって聞かされたのでありまする、勿論容体を聞く気でありますから、お雪の方でも、医者だと思って遠慮がない。

「久しくそんなに致しております内、ちょうどこの十日ばかり前の真夜中の事でございます。寐(ね)られません目をぱちぱちして、瞶(みつ)めておりました壁の表へ、絵に描(か)いたように、茫然(ぼんやり)、可恐(おそろ)しく脊の高い、お神さんの姿が顕(あらわ)れまして、私が夢かと思って、熟(じっ)と瞶めております中(うち)、跫音(あしおと)もせず壁から抜け出して、枕頭(まくらもと)へ立ちま

したが、面長で険のある、鼻の高い、凄いほど好い年増なんでございますよ。それが貴方、着物も顔も手足も、稲光を浴びたように、蒼然で判然と見えました。」

「可訝しいね。」

「当然なら、あれとか、きゃッとか声を立てますのでございますが、どう致しましたのでございますか、別に怖いとも思いませんと、こう遣って。」

と枕に顔を仰向けて、清しい目を睜って熟と瞳を据えました。小宮山は悚然とする。

「そのお神さんが、不思議ではありませんか、ちゃん

と私の名を存じておりまして、
（お雪や、お前、あんまり可哀そうだから、私がその病気を復して上げる、一所においで。）
と立ったまま手を引くように致しましたが、いつの間にやら私の体は、あの壁を抜けて戸外へ出まして、見覚のある裏山の方へ、冷たい草原の上を、貴方、跣足ですたすた参るんでございます。」

十

「零余子などを取りに参ります処で、知っております

んでございますが、そんな家（うち）はある筈（はず）はございません、破家（あばらや）が一軒、それも茫然（ぼんやり）して風が吹けば消えそうな、そこが住居（すまい）なんでございましょう。お神さんは私を引入れましたが、内に入りますと貴方どうでございましょう、土間の上に台があって、荒筵（あらむしろ）を敷いてあるんでございますよ、そこらは一面に煤（すす）ぼって、土間も黴（かび）が生えるように、じくじくして、隅の方に、お神さんと同じ色の真蒼（まっさお）な灯（あかり）が、ちょろちょろと点（とも）れておりました。

（どうだ、お前ここにあるものを知ってるかい。）とお神さんは、その筵の上にあるものを、指（ゆびさし）をして見せ

ますので、私は恐々覗(こわごわのぞ)きますと、何だか厭(いや)な匂のする、
色々な雑物(ぞうもつ)がございましたの。
（これはの、皆人を磔(はりつけ)に上げる時に結えた縄だ、）っ
て扱(しご)いて見せるのでございます。私はもう、気味が悪
いやら怖いやら、がたがた顫(ふる)えておりますと、お神さ
んがね、貴方、ざくりと釘を掴(つか)みまして、
（この釘は丑(うし)の時参(ときまいり)が、猿丸の杉に打込んだので、
呪(のろい)の念が錆附(さびつ)いているだろう、よくお見。これはね
大工が家を造る時に、誤って守宮(やもり)の胴の中へ打込んだ
ものじゃ、それから難破した船の古釘、ここにあるの
は女の抜髪、蜥蜴(とかげ)の尾の切れた、ぴちぴち動いてるの

を見なくちゃ可（い）けない。）と差附けられました時は、ものも言われません。

（お雪、私がこれを何にする、定めしお前は知っていよう。）どうして私が知っておりましょう。

（うむ、知ってる、知っている筈じゃないか、どうだ。）と責めるように申しますから、私はどうなる事でしょうと、可恐（おそろ）しさのあまり、何にも存じませんと、自分にも聞えませんくらい。

（何存ぜぬことがあるものか、これはな、お雪、お前の体に使うのだ、これでその病気を復（なお）してやる。）と屹（きっ）と睨（にら）んで言われましたから、私はもう舌が硬（こわば）ってし

まいましたのでございます。お神さんは落着き払って、何か身繕（みづくろい）をしましたが、呪文のようなことを唱えて、その釘だの縄だのを、ばらばらと私の体へ投附けますじゃありませんか。

はッと思いますと、手も足も顫える事が出来なくなったので、どうでございましょう、そのまま真直（まっすぐ）に立ったのでございますわ。

そう致しますとお神さんは、棚の上からまた一つの赤い色の罎（びん）を出して、口を取ってまた呪文を唱えますとね、黒い煙が立登って、むらむらとそれが、あの土間の隅へ寛（ひろ）がります、とその中へ、おどろのような髪

を乱して、目の血走った、鼻の尖った、瘦ツこけた女が、俯向けなりになって、ぬっくり顕れたのでございますよ。

（お雪や、これは嫉妬で狂死をした怨念だ。これをここへ呼び出したのも外じゃない、お前を復してやるその用に使うのだ。）と申しましてね、お神さんは突然袖を捲って、その怨念の胸の処へ手を当てて、ずうと突込んだ、思いますと、がばと口が開いて、拳が中へ。」

と言懸けました、声に力は籠りましたけれども、体は一層力無げに、幾度も溜息を吐いた、お雪の顔は蒼ざめて参りまする。小宮山は我を忘れて枕を半。

「そのまま真白《まっしろ》な肋骨《あばらぼね》を一筋、ぽきりと折って抜取りましてね。

（どうだ、手前《てめえ》が嫉妬で死んだ時の苦しみは、何とこのくらいのものだったかい。）と怨念に向いまして、お神さんがそう云いますと、あの、その怨霊《おんりょう》がね、貴方、上下《うえした》の歯を食い緊《しば》って、（ううむ、ううむ。）と二つばかり、合点々々を致したのでございますよ。

（可《よ》し。）とお神さんが申しますと、怨念はまたさっきのような幅の広い煙となって、それが段々罎の口へ入ってしまいました。

それからでございますが。」

とお雪は打戦（うちわなな）いて、しばらくは口も利けません様子。

十一

さてその時お雪が話しましたのでは、何でもその孤家（ひとつや）の不思議な女が、件（くだん）の嫉妬で死んだ怨霊の胸を発（あば）いて抜取ったという肋骨（あばらぼね）を持って前（ぜん）申しまする通り、釘だの縄だのに、呪（のろ）われて、動くこともなりませんで、病み衰えておりますお雪を、手ともいわず、胸、肩、背ともいわず、びしびしと打ちのめして、

（さあどうだ、お前、男を思い切るか、それを思い切

りさえすれば復（なお）る病気じゃないか、どうだ、さあこれでも言う事を聞かないか、薬は利かないか。）

と責めますのだそうでありまする、その苦しさが耐えられませぬ処から、

（御免なさいまし、御免なさいまし、思い切ります。）

と息の下で詫びまする。それでは帰してやると言う、お雪はいつの間にか旧（もと）の閨（ねや）に帰っております。翌晩（あくるばん）になるとまた昨夜（ゆうべ）のように、同じ女が来て手を取って引出して、かの孤家へ連れてまいり、釘だ、縄だ、抜髪だ、蜥蜴（とかげ）の尾だわ、肋骨（あばらぼね）だわ、同じ事を繰返して、骨身に応（こた）えよと打擲（ちょうちゃく）する。

（お前、可い加減な事を言って、ちっとも思い切る様子はないではないか。さあ、思い切れ、思い切ると判然(はっきり)言え、これでも薬はまだ利かぬか。）

と言うのだそうでありますな。

申すまでもありません、お雪はとても辛抱の出来る事ではないのですから、きっと思い切ると言う。

それではと云って帰しまする。

翌晩(あくるばん)も、また翌晩も、連夜(まいよ)の事できっと時刻を違(たが)えず、その緑青で鋳出(いだ)したような、蒼い女が遣って参り、例の孤家へ連れ出すのだそうでありますが、口頭(くちさき)ばかりで思い切らない、不埒(ふらち)な奴、引摺(ひきず)りな阿魔めと、果(はて)

は憤（いか）りを発して打ち打擲を続けるのだそうでございまして。

お雪はこれを口にするさえ耐えられない風情に見えました。

「貴方、どうして思い切れませんのでございましょう。私は余り折檻（せっかん）が辛うございますから、確（たしか）に思い切りますと言うんですけれども、またその翌晩（あくるばん）同じ事を言って苦しめられます時、自分でも、成程と心付きますが、本当は思い切れないのでございますよ。

どうしてこれが思い切れましょう、因縁とでも申しますのか、どう考え直しましても、叱ってみても宥（なだ）め

てみても、自分が自由にならないのでございますから、大方今に責め殺されてしまいましょう。」
と云う、顔の窶れ、手足の細り、たゆげな息使い、小宮山の目にも、秋の蝶の日に当ったら消えそうに見えまして、
「死ぬのはちっとも厭いませぬけれども、晩にまた酷い目に逢うのかと、毎日々々それを待っているのが辛くってなりません。貴方お察し遊ばして。
　本当に慾も未来も忘れましてどうぞまあ一晩安々寐て、そうして死にますれば、思い置く事はないと存じながら、それさえ自由になりません、余りといえば悔

しゅうございましたのに、こうやってお傍（そば）に置いて下さいましたから、いつにのう胸の動悸（どうき）も鎮りまして、こんな嬉しい事はございませぬ。まあさぞお草臥（くたびれ）なさいまして、お眠うもございましょうし、お可煩（うるそ）うございましょうのに、つい御言葉に甘えまして、飛んだ失礼を致しました。」

人にも言わぬ積り積った苦労を、どんなに胸に蓄（たくわ）えておりましたか、その容体ではなかなか一通りではなかろうと思う一部始終を、悉（くわ）しく申したのでありまする。

さっきから黙然（もくねん）として、ただ打頷（うちうなず）いておりました

小宮山は、何と思いましたか力強く、あたかも虎を摶(てうち)にするがごとき意気込で、蒲団の端を景気よくとんと打って、むくむくと身を起し、さも勇ましい顔で、莞爾(にっこり)と笑いまして、

「訳はない。姉さん、何の事(こつ)たな。」

十二

「皆(みんな)そりゃ熱のせいだ、熱だよ。姉さんも知ってるだろうが、熱じゃ色々な事を見るものさ。疫(えやみ)の神だの疱瘡(ほうそう)の神だのと、よく言うじゃないか、みんなこれ

は病人がその熱の形を見るんだっさ。
なかにも、これはちいッと私が知己（ちかづき）の者の維新前後の話だけれども、一人、踊で奉公をして、下谷（したや）辺のあるお大名の奥で、お小姓を勤めたのがね、ある晩お相手から下って、部屋へ、平生（ふだん）よりは夜が更けていたんだから、早速お勤（つとめ）の衣裳（いしょう）を脱いでちゃんと伸（の）して、こりゃ女の嗜（たしなみ）だ、姉さんなんぞも遣るだろうじゃないか。」
「はい。」
「まあお聞きそれから縞（しま）のお召縮緬（めしちりめん）、裏に紫縮緬の附いた寝衣（ねまき）だったそうだ、そいつを着て、紅梅の扱帯（しごき）を

しめて、蒲団の上で片膝を立てると、お前、後毛《おくれげ》を掻上《かきあ》げて、懐紙で白粉《おしろい》をあっちこっち、拭《ふ》いて取る内に、唇に障《さわ》るとちょいと紅《べに》が附いたろう。お小姓がね、皺《しわ》を伸してその白粉の着いた懐紙を見ていたが、何と思ったか、高島田に挿している銀の平打の簪《かんざし》、※《まるにいのじ》［＃丸い、407-8］が附いている、これは助高屋《すけたかや》となった、沢村訥升《とつしょう》の紋なんで、それをこのお小姓が、大層贔屓《ひいき》にしたんだっさ。簪をぐいと抜いてちょいと見るとね、莞爾《にっこり》笑いながら、そら今口紅の附いた懐紙にぐるぐると巻いて、と戴《いただ》いたとまあお思い。

可いかい、それを文庫へ了《しま》って、さあ寝支度も出来

た、行燈（あんどう）の灯（ひ）を雪洞（ぼんぼり）に移して、こいつを持つとすッと立って、絹の鼻緒の嵌（すが）った層（かさ）ね草履をばたばた、引摺って、派手な女だから、まあ長襦袢（ながじゅばん）なんかちらちらとしたろうよ。

　長廊下を伝って便所へ行（ゆ）くものだ。矢だの、鉄砲だの、それ大袈裟（おおげさ）な帯が入るのだから、便所は大きい、広い事、畳で二畳位は敷けるのだと云うよ。それへ入ろうとするとね、えへん！　ともいわず歌も詠（よ）まないが、中に人のいるような気勢（けはい）がするから、ふと立停（たちどま）った、しばらく待ってても、一向に出て来ない、気を鎮めてよく考えると、なあに、何も入っていはしないよ

うだったっさ。
　ええ、姐（ねえ）さん変じゃないか、気が差すだろう。それからそのお小姓は、雪洞を置いて、ばたりと戸を開けたんだ、途端に、大変なものが、お前心持を悪くしては可（い）けない、これがみんな病のせいだ。
　戸を開けると一所に、中に真俯向（まうつむ）けになっていた、穢（きたな）い婆（ばばあ）が、何とも云いようのない顔を上げて、じろりと見た、その白髪（しらが）というものが一通りではない、銀の針金のようなのが、薄（すすき）を一束刈ったように、ざらざらと逆様に立った。お小姓はそれッきり。
　さあ、お奥では大騒動、可恐（おそろ）しい大熱だから伝染（うつッ）て

も悪し、本人も心許（こころもと）ないと云うので、親許へ下げたのだ。医者はね、お前、手を放してしまったけれども、これは日ならず復（なお）ったよ。

我に反（かえ）るようになってから、その娘の言うのには、現（うつつ）の中ながらどうかして病が復したいと、かねて信心をする湯島の天神様へ日参をした、その最初の日から、自分が上がろうという、あの男坂の中程に厠（かわや）で見た穢ない婆が、掴（つか）み附きそうにして控えているので、悄然（しょんぼり）と引返す。翌日（あくるひ）行くとまた居やがる。行っちゃ帰り、行っちゃ帰り、ちょうど二十日（はつか）の間、三七二十一日目の朝、念（おもい）が届いてお宮の鰐口（わにぐち）に縋（すが）りさえすれば、

命の綱は繋（つな）げるんだけれども、婆に邪魔をされてこの坂が登れないでは、所詮こりゃ扶（たす）からない、ええ悔しいな、たとえ中途で取殺されるまでも、お参（まいり）をせずに措（お）くものかと、切歯（はがみ）をして、下じめをしっかりとしめ直し、雪駄（せった）を脱いですたすたと登り掛けた。

遮っていた婆は、今娘の登って来るのを、可恐（おそろ）しい顔で睨（にら）め附けたが、ひょろひょろと摑（つかま）って、冷い手で咽（のど）をしめた、あれと、言ったけれども、もう手足は利かず、講談でもよく言うがね、既に危（あやう）きそこへ。」

十三

「上（かみ）の鳥居の際へ一人出て来たのが、これを見るとつかつかと下りた、黒縮緬三ツ紋の羽織、仙台平（せんだいひら）の袴（はかま）、黒羽二重（はぶたえ）の紋附を着て宗十郎頭巾（ずきん）を冠（かぶ）り、金銀を鏤（ちりば）めた大小、雪駄穿（ばき）、白足袋で、色の白い好（い）い男の、年若な武士で、大小などは旭（ひ）にきらきらして、その立派さといったらなかったそうだよ。石段の上の方から、ずって寄って、

（推参な、婆あ見苦しい。）と言いさま、お前、疫病神の襟首を取って、坂の下へずでんどうと逆様に投げ飛ばした、可い心持じゃないか。お小姓の難有（ありがた）さ、神と

も仏ともただもう手を合せて、その武士を伏拝んだと思うと、我に返ったという。

それから熱が醒めて、あの濡紙を剝ぐように、全快をしたんだがね、病気の品に依っては随分そういう事が有勝のもの。

お前の女に責められるのも、今の話と同じそれは神経というものなんだから、しっかりして気を確に持って御覧、大丈夫だ、きっとそんなものが連れ出しに来るなんて事はありゃしない。何も私が学者ぶって、お前さんがそれまでに判然した事を言うんだもの、嘘だの、馬鹿々々しいなどとは決して思うんじゃないよ。

可いかい、姐さん、どうだ、解ったかね。」

と小宮山は且つ慰め、且つ諭したのでありまする、そう致しますと、その物語の調子も良く、取った譬（たとえ）も腑（ふ）に落ちましたものと、見えて、

「さようでございますかね。」

と申した事は纔（わずか）ながら、よく心も鎮って、体も落着いたようでありまする。

「そうとも、全くだ。大丈夫だよ、なあにそんなに気に懸ける事はない、ほんのちょいと気を取直すばかりで、そんな可怪（あや）しいものは西の海へさらりださ。」

「はい、難有（ありがと）う存じます、あのう、お蔭様で安心を致

しましたせいか、少々眠くなって参ったようでございますわ。」

と言い難（にく）そうに申しました。

「さあさあ、寝（ね）るが可い、寝るが可い。何でも気を休めるが一番だよ、今夜は附いているから安心をおし。」

「はい。」

と言ってお雪は深く頷（うなず）きましたが、静（しずか）に枕を向（むこう）へ返して、しばらくはものも言わないでおりましたが、また密（そっ）と小宮山の方へ向き直り、

「あのう、壁の方を向いておりますと、やはりあすこから抜け出して来ますようで、怖くってなりませんか

ら、どうぞお顔の方に向かしておいて下さいましな。」

「うむ、可いとも。」

「でございますけれども……。」

「どうした。」

「あのう、極(きまり)が悪うございますよ。」

とほんのり瞼(まぶた)を染めながら、目を塞(ふさ)いでしかも頼母(たのも)しそう、力としまするよう、小宮山の胸で顔を隠すように横顔を見せ、床を隔てながら櫛巻の頭(つむり)を下げ、口の上辺(あたり)まで衾(ふすま)の襟を引寄せましたが、やがてすやすやと寐入ったのでありまする。

その時の様子は、どんなにか嬉しそうであった――

と、今でも小宮山が申しまする。さて小宮山は、勿論寐られる訳ではありませぬから、しばらくお雪の様子を見ていたのでありまする。やや初夜過（すぎ）となりました。

山中の湯泉宿（ゆやど）は、寂然（しん）として静（しずま）り返り、遠くの方でざらりざらりと、湯女（ゆな）が湯殿を洗いながら、歌を唄うのが聞えまする。

この界隈（かいわい）近国の芸妓（げいしゃ）などに、ただこの湯女歌ばかりで呼びものになっているのがありますくらい。怠けたような、淋しいような、そうかというと冴えた調子で、間（あい）を長く引張（ひっぱ）って唄いまするが、これを聞くと何となく睡眠剤を服（の）まされるような心持で、

桂清水（かつらしみず）で手拭（てぬぐい）拾た、　これも小川の温泉（ゆ）
　の流れ。

などという、いわんや巌（いわ）に滴るのか、湯槽（ゆぶね）へ落つるのか、湯気の凝ったのか、湯女歌の相間（あいま）々に、ぱちゃんぱちゃんと響きまするにおいてをや。

十四

これへ何と、前触（まえぶれ）のあった百万遍を持込みましたろうではありませんか、座中の紳士貴婦人方、都育ちのお方にはお覚えはないのでありまするが、三太やあい、

迷イ児(まいご)の迷イ児の三太やあいと、鉦(かね)を叩いて山の裾を廻る声だの、百万遍の念仏などは余り結構なものではありませんな。南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)……南無阿弥陀……南無阿弥陀。

亭主はさぞ勝手で天窓(あたま)から夜具をすっぽりであろうと、心に可笑(おか)しく思いまする、小宮山は山気膚(はだ)に染み渡り、小用(こよう)が達(た)したくなりました。

折角可い心地で寐(ね)ているものを起しては気の毒だ。勇士は轡(くつわ)の音に目を覚ますとか、美人が衾(ふすま)の音に起きませぬよう、そッと抜出して用達しをしてまいり、往復(ゆきかえり)何事もなかったのでありまするが、廊下の一方、

今小宮山が行った反対の隅の方で、柱が三つばかり見えて、それに一つ一つ掛けてあります薄暗い洋燈（ランプ）の間を縫って、ひらひらと目に遮った、不思議な影がありました。それが天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山は驚いて、入（い）り掛けた座敷の障子を開けもやらず、はてな、人魂（ひとだま）にしては色が黒いと、思いまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽（あお）って、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留（とま）った。これは、これは、全くおいでなすったか知らんと、屹（きっ）と見まする、黒い人魂に羽が生えて、耳が出来た、明（あきら）かに認めましたのは、ちょいと鳶（とび）くらいはあろうという、大きな蝙蝠（こうもり）で

あります。

そいつが羽撃（はばたき）をして、ぐるりぐるりと障子に打附（ぶッつ）かって這（は）い廻る様子、その動くに従うて、部屋の中の燈火（ともしび）が、明（あかる）くなり暗くなるのも、思いなし心持のせいでありましょうか。

さては随筆に飛騨（ひだ）、信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人が、病もなく一晩の内に息の根が止（とま）る事がしばしば有る、それは方言飛縁魔（ひのえんま）と称（とな）え、蝙蝠に似た嘴（くちばし）の尖（とんが）った異形なものが、長襦袢を着て扱帯（しごき）を纏（まと）い、旅人の目には妖艶（あでやか）な女と見えて、寝ているものの懐へ入（い）り、嘴を開けると、上下（うえした）で、口、鼻を蔽（おお）い、寐息を

吸って吸殺すがためだとございまする。あらぬか、それか、何にしても妙ではない、かようなものを間の内へ入れてはならずと、小宮山は思案をしながら、片隅を五寸か一尺、開けるが早いか飛込んで、くるりと廻って、ぴしゃりと閉め、合せ目を押え附けて、どっこいと踏張(ふんば)ったのでありまする。しばらく、しっかりと押え附けて、様子を窺(うかが)っておりましたが、それきり物音もしませぬので、まず可(よ)かったと息を吐(つ)き、これから静(しずか)に衾(しとね)の方を向きますると、あにはからんやその蝙蝠は座敷の中をふわりふわり。

南無三宝(なむさんぽう)と呆気(あっけ)に取られて、目を瞬(みは)った鼻っ先を、

件（くだん）の蝙蝠は横撫（よこなで）に一つ、ばさりと当てて向（むこう）へ飛んだ。

何様猫が冷たい処をこすられた時は、小宮山がその時の心持でありましょう。

嚔（くしゃみ）もならず、苦り切って衝立（つッた）っておりますると、蝙蝠は翼を返して、斜（ななめ）に低う夜着の綴糸（とじいと）も震うばかり、何も知らないですやすやと寐ている、お雪の寝姿の周囲（ぐるり）をば、ぐるり、ぐるり、ぐるりと三度。縫って廻られるたびに、ううむ、ううむ、うむと幽（かすか）に呻（うめ）いたと、見るが否や、萎（しお）れ伏したる女郎花（おみなえし）が、無慙（むざん）や風に吹き乱されて、お雪はむッくと起上りましたのであります。

小宮山は論が無い、我を忘れて後（しりえ）に撞（どう）と坐りま

した。
蝙蝠は翻(ひるがえ)って、向側の障子の隙間から、ひらひらと出たと思うと、お雪が後に跟(つ)いてずっと。
蚊帳を出(い)でてまだ障子あり夏の月、雨戸を開けるでもなく、ただ風の入るばかりの隙間から、体がすっと細くなり、水に映(う)つる柳の蔭の隠れたように、ふと外へ出て見えなくなりましたと申しますな。勿論、蝙蝠に引出されたんで。

十五

小宮山は切歯をなして、我赤樫を割って八角に削りなし、鉄の輪十六を嵌めたる棒を携え、彦四郎定宗の刀を帯びず、三池の伝太光世が差添を前半に手挟まずといえども、男子だ、しかも江戸ッ児だ、一旦請合った女をむざむざ魔に取られてなるものかと、追駈けざまに足踏をしたのでありまする。あいにく神通がないので、これは当然に障子を開け、また雨戸を開けて、縁側から庭へ寝衣姿、跣足のままで飛下りる。

戸外は真昼のような良い月夜、虫の飛び交うさえ見えるくらい、生茂った草が一筋に靡いて、白玉の露の散る中を、一文字に駈けて行くお雪の姿、早や小さく

なって見えまする。
小宮山は蝙蝠のごとく手を拡げて、遠くから組んでも留めんず勢（いきおい）。
「おうい、おうい、お雪さん、お雪さん、お雪さん。」
と声を限り、これや串戯（じょうだん）をしては可（い）けないぜと、思わず独言（ひとりごと）を言いながら、露草を踏（ふみ）しだき、薄（すすき）を掻分（かきわ）け、刈萱（かるかや）を押遣って、韋駄天（いだてん）のように追駈けまする、姿は草の中に見え隠れて、あたかもこれ月夜に兎の踊るよう。
「お雪さん、おうい、お雪さん。」
間（あわい）もやや近くなり、声も届きましたか、お雪はふと

歩（あゆみ）を停（とど）めて、後を振返ると両の手を合せました。助けてくれと云うのであろう、哀れさも、不便（ふびん）さもかばかりなるは、と駈け着ける中（うち）、操（あやつり）の糸に掛けられたよう、お雪は、左へ右へ蹌踉（よろよろ）して、しなやかな姿を揉（も）み、しばらく争っているようでありました。けれども、また、颯（さっ）と駈け出して、あわやという中（うち）に影も形も見失ったのでありまする。

処へ、かの魚津の沖の名物としてありまする、蜃気楼（しんきろう）の中の小屋のようなのが一軒、月夜に灯（ともし）も見えず、前途に朦朧（もうろう）として顕（あらわ）れました。

小宮山は三蔵法師を攫（さら）われた悟空という格で、きょ

ろきょろと四辺（あたり）を眴（みまわ）しておりましたが、頂は遠く、四辺（あたり）は曠野（こうや）、たとえ蝙蝠の翼に乗っても、虚空へ飛び上る法ではあるまい、瞬（またたき）一つしきらぬ中（うち）、お雪の姿を隠したは、この家の内に相違ないぞ、這奴（こやつ）！小川山（しょうせんざん）の妖怪ござんなれと、右から左へ、左から右へ取って返して、小宮山はこの家の周囲（まわり）をぐるぐると廻って窺（うかが）いましたが、あえて要害を見るには当らぬ。何の蝸牛（ででむし）みたような住居（すまい）だ、この中に踏み込んで、罷（まか）り違えば、殻を背負（しょ）っても逃げられると、高を括（くく）って度胸が坐ったのでありますから、威勢よく突立（つった）って凛々（りんりん）とした大音声。

「お頼み申す、お頼み申す！　お頼み申す‼」

と続けざまに声を懸けたが、内は森(しん)として応(こたえ)がない、耳を澄ますと物音もしないで、かえって遠くの方で、化けた蛙(かわず)が固まって鳴くように、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。と百万遍。眉を顰(ひそ)めた小宮山は、癪(しゃく)に障るから苛立(いらだ)って喚(わめ)いたり。

「お頼み申す。」

すると、どうでございましょう、鼻ツ先の板戸が音もしないで、すらりと開く。

「騒々しいじゃないかね。」

顔を出したのが、鼻の尖(とが)った、目の鋭い、可恐(おそろ)しく

丈（せ）の高い、蒼い色の衣服（きもの）を着た。凄（すご）い年増（としま）。一目見ても見紛う処はない、お雪が話したそれなんで。

小宮山は思わず退（すさ）った、女はその我にもあらぬ小宮山の天窓（あたま）から足の爪先（つまさき）まで、じろりと見て、片頬笑（かたほわらい）をしたから可恐（おそろ）しいや。

「おや、おいでなさい、柏屋のお客だね。」

言語道断、先（せん）を越されて小宮山はとぼんと致し、

「へい。」と言って、目をぱちくりするばかりでありまする。

「まあ、御苦労様だったね。さっきから来るだろうと思って、どんなに待っていたか知れないよ。さあまあ

こっちへお上りなさい、少し用があるから。」
と言った、文句が気に入らないね、用があるなんざ容易でなさそう。

十六

相手は女だ、城は蝸牛（ででむし）、何程の事やある、どうとも勝手にしやがれと、小宮山は唐突（だしぬ）かれて、度胆（どぎも）を摑（つか）まれたのでありますから、少々捨鉢の気味これあり、臆（おく）せず後に続くと、割合に広々とした一間へ通す。燈火（ともしび）はありませんが暗いような明るいような、畳の数もよ

く見える、一体その明（あかり）がというと、女が身に纏（まと）っている、その真蒼（まっさお）な色の着物から膚（はだえ）を通して、四辺（あたり）に射拡（さしひろ）がるように思われるのでありまする。

「ちょいと託（ことづ）ける事があるのだから、折角見えたものを情（すげ）なく追帰すのも、お気の毒だと思って、通して上げましたがね、熟（じっ）として待っていなさい。私の方に支度があるのだから、お前さんまた大きな声を出したり、威張ったり、お騒ぎだと為（ため）になりませんよ。」

と頭から呑んでかかって、そのままどこかへ、ずい。

呑まれた小宮山は、怪しい女の胃袋の中で消化（こな）れたように、蹲（つくば）ってそれへ。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、風が引いたり寄せたりして聞えまする、百万遍。

忌々(いまいま)しいなあ、道中じゃ弥次郎兵衛(やじろべえ)もこれに弱ったっけ、耐(たま)ったものではないと、密(そっ)と四辺(あたり)を眴(みまわ)しますると、塵(ちり)一ッ葉(ぱ)も目を遮らぬこの間の内に床が一つ、草を銜(くわ)えた神農様の像が一軸懸(かか)っておりまするので、小宮山は訳が解らず、何でもこれは気を落着けるにしく事なしだと、下ッ腹へ力を入れて控えておりまする。

またしても百万遍。小宮山はそれを聞くと悪寒がするくらい、聞くまい、聞くまいとする耳へ、ひいひい女

の泣声が入りました。屹(きつ)となって、さあ始めやがった、あン畜生、また肋(あばら)の骨で遣ってるな、このままじゃ居られないと、突立(つッた)ちました小宮山は、早く既にお雪が話の内の一員に、化しおおしたのであります。

その場へ踏み込み扶(たす)けてくりょうと、いきなり隔(へだて)の襖(ふすま)を開けて、次の間へ飛込むと、広さも、様子も同じような部屋、また同じような襖がある。引開けると何もなく、やっぱり六畳ばかりの、広さも、様子も、また襖がある。がたりと開ける、何もなくて少しも違わない部屋であります。

阿房宮より可恐(おそろ)しく広いやと小宮山は顚倒(てんとう)して、手

当り次第に開けた開けた。幾度遣っても笥（たかんな）の皮を剥（む）くに異ならずでありまするから、呆れ果てて撞（どう）と尻餅、茫然（ぼんやり）四辺（あたり）を眴（みまわ）しまする と、神農様の画像を掛けた、さっき女が通したのと同じ部屋へ、おやおやおや。また南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と耳に入ると、今度は小宮山も釣込まれて、思わず南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

　その時すらりと襖を開け、

「誰方（どなた）だい、今お騒ぎなすったのは。」

「へい。」といった、後はもうお念仏になりそうな、小宮山は恐る恐る、女の微笑（ほほえ）んでおります顔を見て、ど

うかこうか、まあ殺されずに済みそうだと、思うばかりでございまする。

「一体物好(ものずき)でこんな所へ入って来たお前さんは、怖いものが見たいのだろう。少々ばかりね。」

「いえ、何。」と口の内。

「まあ、おいでなさい。」

妾(わらわ)に跟(つ)いてこっちへと、宣示(のりしめ)すがごとく大様に申して、粛然と立って導きますから、詮方(せんかた)なしに跟(つ)いて行く。土間が冷く踵(くびす)に障ったと申しますると、早や小宮山の顔色蒼然(そうぜん)！

話に聴いた、青色のその燈火(ともしび)、その台、その荒筵(あらむしろ)、

その四辺（あたり）の物の気勢（けはい）。

お雪は台の向（むこう）へしどけなく、崩折（くずお）れて仆（たお）れていたのであります。女は台の一方へ、この形（かた）なしの江戸ッ児を差置いて、一方へお雪を仆した真中（まんなか）へぬッくと立ち、袖短（そでみじか）な着物の真白（まっしろ）な腕を、筵の上へ長く差し伸（のば）して、ざくりと釘を一ト摑（つかみ）。

「どうだね、お客様。」

「どう致しまして。」

小宮山は慇懃（いんぎん）に辞退をいたしまする。

十七

「これを知っていなさるかえ。」

と二の腕を曲げて、件(くだん)の釘を乳の辺へ齎(もたら)して、掌(てのひら)を拡げて据えた。

「どう致しまして。」

「知らない？」

「いえ、何、存じております。」

「それじゃこれは。」

「へい。」

「女の脱髪(ぬけがみ)。」

小宮山は慌(あわただ)しく、

「どう致しまして。」
「それじゃ御覧。」
と撮(つま)んで宙で下げたから、そそげた黒髪がさらさらと動きました。
「いえ、何、存じております。」
「これは。」
「存じております。」
「それから。」
「存じております。」
「それでは、何の用に立つんだか、使い方を知っているのかえ。」

迂闊（うっかり）知らないなぞと言おうものなら、使い方を見せようと、この可恐（おそろ）しい魔法の道具を振廻されては大変と、小宮山は逸早（すばや）く、

「ええ、もう存じておりますとも。」

と一際念入りに答えたのでありまする。言葉尻も終らぬ中（うち）、縄も釘もはらはらと振りかかった、小宮山はあッとばかり。

ちょいと皆様に申上げまするが、ここでどうぞ貴方がたがあッと仰有（おっしゃ）った時の、手附、顔色（かおつき）に体の工合（ぐあい）をお考えなすって下さいまし。小宮山は結局（つまり）、あッと言った手、足、顔、そのままで、指の尖（さき）も動かなくなっ

たのでありまする。

「よく御存じでございましたね。」

と嘲弄（ちょうろう）するごとく、わざと丁寧に申しながら、尻目に懸けてにたりとして、向（むこう）へ廻り、お雪の肩へその白い手を掛けました。

畜生！　飛附いて扶（たす）けようと思ったが、動けるどころの沙汰ではないので、人はかような苦しい場合にも自ら馬鹿々々しい滑稽の趣味を解するのでありまする、小宮山はあまりの事に噴出（ふきだ）して、我と我身を打笑い、

「小宮山何というざまだ、まるでこりゃ木戸銭は見てのお戻りという風だ、東西、」

と肚の内。

女はお雪の肩を揺動かしましたが、何とも不思議な凄い声で、

「雪や、苦しいか。」

お雪はいとど俯向いていた顔を、がっくりと俯向けました。

「うむ、もう可い、今夜は酷い目に逢わしやしないから、心配をする事はないんだよ。これまで手を変え、品を変え、色々にしてみたが、どうしてもお前は思い切らない、何思い切れないのだな、それならそれで可いようにして上げようから。」

と言聞かしながら、小宮山の方を振向いたのでありまする。

「お客様、お前は性悪（しょうわる）だよ、この子がそれがためにこの通りの苦労をしている、篠田と云う人と懇意なのじゃないか、それだのにさ、道中荷が重くなると思って、託（ことづけ）も聞こうとはせず、知らん顔をして聞いていたろう。」

と鋭い目で熟（じっ）と見られた時は、天窓（あたま）から、悚然（ぞっ）として、安本亀八（かめはち）作、小宮山良助あッと云う体（てい）にござりまする活人形（いきにんぎょう）へ、氷を浴（あび）せたようになりました。

「その換（かわ）り少しばかり、重い荷を背負（しょ）わして上げるか

ら、大事にして東京まで持って行きなさい。託（ことづけ）というのはそれなんだがね、お雪はとても扶（たすか）らないのだから、私も今まで乗懸（のりかか）った舟で、この娘の魂をお前さんにおんぶをさして上げるからね、密（そっ）と篠田の処まで持って行くのだよ。さぞまあお邪魔でございましょうねえ。」

十八

小宮山がその形で突立（つッた）ったまま、口も利けないのに、女は好（すき）な事をほざいたのでありまする。

それから女は身に纏(まと)った、その一重(ひとえ)の衣(きもの)を脱ぎ捨てまして、一糸も掛けざる裸体になりました。小宮山は負惜(まけおしみ)、此奴(こいつ)温泉場の化物だけに裸体だなと思っておりまする。女はまた一つの青い色の罎(びん)を取出しましたから、これから怨念が顕(あらわ)れるのだと恐(おそれ)を懐(いだ)くと、かねて聞いたとは様子が違い、これは掌(てのひら)へ三滴(みたらし)ばかり仙女香(せんじょこう)を使う塩梅(あんばい)に、両の掌(てのひら)でぴたぴたと揉(も)んで、肩から腕へ塗り附け、胸から腹へ塗り下げ、襟耳の裏、やがては太股(ふともも)、脹脛(ふくらはぎ)、足の爪先まで、隈(くま)なく塗り廻しますると、真直(まっすぐ)に立上りましたのでありまする。

小宮山は肚(はら)の内で、

「東西。」

女はそう致して、的面(まとも)に台に向いまして、ちちんぷいぷい、御代(ごよ)の御宝(おんたから)と言ったのだか何だか解りませぬが、口に怪しい呪文を唱えて、ばさりばさりと双(ふたつ)の腕(かいな)を、左右へ真直(まっすぐ)に伸(の)したのを上下(うえした)に動かしました。体がぶるぶるッと顫(ふる)えたと見るが早いか、掻消(かきけ)すごとく裸身(はだかみ)の女は消えて、一羽の大蝙蝠となりましてございまする。

例のごとくふわふわと両三度土間の隅々を縫いましたが、いきなり俯(うつむ)けになっているお雪の顔へ、顔を押当て、翼でその細い項(うなじ)を抱いて、仰向(あおむ)けに嘴(くちばし)でお雪

の口を圧（おさ）えまして、すう、すうと息を吸うのでありまする。

これを見せられた小宮山は、はッと思って息を引いたが、いかんともする事叶（かな）わず、依然としてそのあッと云う体（てい）。

二度三度、五度六度、やや有って息を吸取ったと見えましたが、お雪の体は死んだもののようになってはたと横様に仆（たお）れてしまいました。

喫驚（びっくり）仰天はこれのみならず、蝙蝠がすッと来て小宮山の懐へ、ふわりと入（い）りましたので、再びあッと云って飛び上ると同時に、心付きましたのは、旧（もと）の柏屋の

座敷に寝ていたのでありまする。

　大息を吐いて、蒲団の上へ起上った、小宮山は、自分の体か、人のものか、よくは解らず、何となく後見らるるような気がするので、振返って見まするると、障子が一枚、その外に雨戸が一枚、明らさまに開いて月が射し、露なり、草なり、野も、山も、渺々として、鶏、犬の声も聞えませぬ。何よりもまず気遣わしい、お雪はと思う傍に、今息を吸取られて仆れたと同じ形になって、生死は知らず、姿ばかりはありました。

　小宮山は冷たい汗が流れるばかり、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、と隣で操り

進む百万遍の声。

「姐(ねえ)さん、姐さん、」

小声で呼んでみたが返事がないので、もしやともう耐(たま)らず、夜具の上から揺振(ゆすぶ)りました。

「お雪さん。」

三声ばかり呼ぶと、細く目を開いて小宮山の顔を見るが否や、さもさも物に恐れた様子で、飛着くように、小宮山の帯に縋(すが)り、身を引緊(ひきし)めるようにして、坐った膝に突伏(つっぷ)しまする。戦(おのの)く背中を小宮山はしっかと抱(いだ)いた、様子は見届けたのでありまするから、哀れさもまた百倍。

怖さは小宮山も同じ事、お雪の背中へ額を着けて、夜の明くるのをただ、一刻千秋の思(おもい)で待構えまする内に疲れたせいか、我にもあらずそろそろと睡(まどろ)みましたと見えて、目が覚めると、月の夜(よ)は変り、山の端(は)に晴々しい旭(あさひ)、草木の露は金色(こんじき)を鏤(ちりば)めておりました。密(そっ)と膝から下すと、お雪はやはりそのままに、すやすやと寐入(ねい)っている。

「お早うございます。」

と声を懸けて、機嫌聞きに亭主が真先(まっさき)、百万遍さえ止(や)みますれば、この親仁(おやじ)大元気で、やがてお鉄も参り、

「お客様お早うございます。」

十九

小宮山は早速嗽手水（うがいちょうず）を致して心持もさっぱりしましたが、右左から亭主、女共が問い懸けまする昨晩の様子は、いや、ただお雪がちょいと魘（うな）されたばかりだと言って、仔細（しさい）は明しませんでございました、これは後（のち）の事を慮（きづか）って、皆が恐れげなくお雪の介抱をしてやる事が出来るようにと、気を着けたのでありまする。

お雪の病気を復（なお）すにも怪しいものを退治るにも、耆婆扁鵲（きばへんじゃく）に及ばず、宮本武蔵、岩見重太郎にも及ばず、

ただ篠田の心一つであると悟りましたので、まだ、二日三日も居て介抱もしてやりたかったのではありますけれども、小宮山は自分の力では及ばない事を知り、何よりもまず篠田に逢ってと、こう存じましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

　その柏屋を立ちまする時も、お雪はまだ昨夜（ゆうべ）のまま寝ていたのでありまする。失礼な起しましょうと口々に騒ぐを制して、朝餉（あさげ）も別間において認（したた）め、お前さん方が何も恐（こわ）がる程の事はないのだから、大勢側に附いて看病をしておやんなさいと、暮々も申し残して後髪を引かれながら。

その日、糸魚川から汽船に乗って、直江津に着きました晩、小宮山は夷屋（えびすや）と云う本町の旅籠屋に泊りました、宵の口は何事も無かったのでありまするが、真夜中にふと同じ衾（しとね）にお雪の寝ているのを、歴々（ありあり）と見ましたので、喫驚（びっくり）する途端に、寝姿が向（むこう）むきになったその櫛巻が溢（こぼ）れて、畳の上へざらりという音。

枕に着かるるどころではありませぬ、ああ越中と越後と国は変っても、女の念（おもい）は離れぬかとまさかに魂を託（ことづか）ったとまでは、信じなかったのでありまするけれども、つくづく溜息をしたのであります。

夜が明けると、一番の上り汽車、これが碓氷（うすい）の隧道（トンネル）

を越えます時、その幾つ目であったそうで。

小宮山は何心なく顔を出して、真暗（まっくら）な道の様子を透（すか）していると、山清水の滴る隧道の腹へ、汽車の室内の灯（ともしび）で、その顔が映ったのでありまする、と並んで女の顔が映りました。確（たしか）にそれがお雪の面影。

それぎり何事もなく、汽車は川中島を越え、浅間の煙を望み、次第に武蔵（むさし）の平原に近づきまする。

上野に着いたのは午後の九時半、都に秋風の立つはじめ、熊谷（くまがい）土手から降りましたのがその時は篠（しの）を乱すような大雨でございまして、俥（くるま）の便（たより）も得られぬ処から、小宮山は旅馴れてはいる事なり、蝙蝠傘を差した

ままで、湯島新花町の下宿へ帰ろうというので、あの切通（きりどおし）へ懸（かか）りました時分には、ぴったり人通りがございません。後（うしろ）から、

「姐さん、参りましょうか、姐さん。」

と声を懸けたものがある。

振返って見ると誰も居ませんで、ただざあざッという雨に紛れて、轍（わだち）の音は聞えませぬが、一名の車夫が跟（つ）いて来たのでありました。

小宮山は慄然（ぎょっ）として、雨の中にそのまま立停（たちどま）って、待てよ、あるいはこりゃ託（ことづか）って来たのかも知れぬと、悚然（ぞっ）としましたが、何しろ、自宅へ背負（しょ）い込んでは妙

ならずと、直ぐに歩(あゆみ)を転じて、本郷元町へ参りました。

ここは篠田が下宿している処でありまする、行馴れている門口(かどぐち)、猶予(ためら)わず立向うと、まだ早いのに、この雨のせいか、もう閉っておりましたが、小宮山は馴れている、この門と並んで、看護婦会がありまする、雨滴(あまだれ)を払いながらその間の路地を入ると、突当(つきあたり)の二階が篠田の座敷、灯も点(つ)いて、寝ない様子。するとまだ声を懸けない先に、二階ではその灯を持って、どこへか出たと見えて、障子が暗くなりました。しばらく待っていても帰りませぬ。

下へ下りたのであろうも知れぬ、それならばかえっ

て門口で呼ぶ方が早手廻しだと、小宮山はまた引返して参りますと、つい今錠の下りていた下宿屋の戸が、手を掛けると訳もなく開(あ)きましたと申します。
何事も思わず開けて入り、上框(あがりがまち)に立ちましたが、帳場に寝込んでおりますから、むざとは入らないで、
「篠田、篠田。」
と高らかに呼(よば)わりまするど、三声とは懸けさせず、篠田は早速に下りて来て、
「ああ、今帰ったのかえ、さあさあまあ上りたまえ。」
と急遽(いそいそ)先に立ちます。小宮山は後に跟(つ)いて二階に上り、座敷に通ると、篠田が洋燈(ランプ)を持ったまま、入口に

立停(たちどま)って、内を透(すか)し、

「おや、」と言って、きょろきょろ四辺(あたり)を眴(みまわ)しておりますが、何か気抜のしたらしい。小宮山はずっと寄って、その背(せな)を叩かぬばかり、

「どうした。」

「もう何も彼(か)も御存じの事だから、ちっとも隠す事はない、ただ感謝するんだがね、君が連れて来て一足先へ入ったお雪が、今までここに居たのに、どこへ行ったろう。」

と真顔になって申しまする。

小宮山はまた悚然(ぞっ)とした。

「ええ、お雪さんが、どんな様子で。」

「実は今夜本を見て起きていると、たった今だ、しきりにお頼み申しますと言う女の声、誰に用があって来たのか知らぬが、この雨の中をさぞ困るだろうと、僕が下りて行って開けてやったが、見るとお雪じゃないか。小宮山さんと一所だと言う、体は雨に濡れてびっしょり絞るよう、話は後からと早速ここへ連れて来たが、あの姿で坐っていた、畳もまだ湿っているだろうよ。」

と篠田はうろうろしてばたばた畳の上を撫でてみまする。この様子に小宮山は、しばらく腕組をして、黙っ

て考えていましたが、開き直ったという形で、
「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、それまでまあ君心を鎮めて待ってくれ。それじゃ託り物を渡したぜ。」
「ええ。」
「いえ、託り物は渡したんだぜ。」
「託り物って何だ。」
「今受取ったそれさ。」
「何を、」と篠田は目も据らないで慌てております。
「まあ、受取ったと言ってくれ。ともかくも言ってくれ、後で解る事だから頼む、後生だから。」

魂の請状（うけじょう）を取ろうとするのでありますから、その掛引は難かしい、無暗（むやみ）と強いられて篠田は夢現（うつつ）とも弁（わきま）えず、それじゃそうよ、請取ったと、挨拶があるや否や、小宮山は篠田の許（もと）を辞して、一生懸命に駈出した、さあ荷物は渡した、東京へ着いたわ、雨も小止（こや）みかこいつは妙と、急いで我家へ。

翌日取（とり）も置かず篠田を尋ねて、一部始終悉（くわ）しい話を致しますると、省みて居所も知らさないでいた篠田は、蒼くなって顫（ふる）え上ったと申しますよ。

これから二人連名で、小川の温泉へ手紙を出した。

一週間ばかり経（た）って、小宮山が見覚（みおぼえ）のあるかの肌に着

けた浴衣と、その時着ておりました、白粉垢（おしろいあか）の着いた袷（あわせ）とを、小包で送って来て、あわれお雪は亡（なく）なりましたという添状。篠田は今でも独身（ひとり）で居（お）りまする。二人ともその命日は長く忘れませんと申すのでありまする。

飛んだ長くなりまして、御退屈様、済みませんでございました、失礼。

明治三十三（一九〇〇）年五月

底本：「泉鏡花集成２」ちくま文庫、筑摩書房
　　　１９９６（平成８）年４月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第五巻」岩波書店
　　　１９４０（昭和15）年３月30日発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００７年２月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。